
ロリコンで何が悪い!!

しょーちゃん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ロリコンで何が悪い！！

【Nコード】

N2843M

【作者名】

しょーちゃん

【あらすじ】

朝傘を忘れてしまった青年が雨の中走って家に帰る途中幼女とぶつかってしまった。

青年は慌てて『大丈夫？』と言ったが

幼女は『大丈夫』と言った瞬間倒れてしまった！！

青年は仕方なく自分の家に幼女を運んだのだが！？

第一章出会い・・・（前書き）

処女作なので至らない点だらけですがどうかその広い心で見守ってください！！

アドバイスもよろしくおねがいします。
これから精進していくつもりです。

第一章出会い・・・

それは、高校に入って3回目の蒸々とした梅雨の時季だった。

その日の夕方の放課後俺は窓の外を見ながら傘を忘れた事を思い出した。

雨の中走って帰らなきゃいけないと思うと、とても憂鬱な気分になった。

『ああ、糞！！ 昨日深夜までゲームするんじゃなかった！！』

そんな事を後悔しながらびしょ濡れになって帰り道を走って帰っていた。

すると、急に大きな物体と衝突して俺は派手にこけた。

『いててて・・・なんなんだよまったく・・・』

ふと顔を上げるとそこには俺とぶつかったと思える少女が同じく転んでいた。

『君！ 大丈夫かい？』

俺は咄嗟とっさに少女に声を掛けた。

『こちらこそ、ごめんなさい！ はい、大丈夫です』

少女は、そう言いつつも足からは血が流れている。
どうやら掠り傷だけの様だ。

『怪我をしてるじゃないか！ぶつかったのは俺のせいだし怪我の手当てをさせてくれないか？』

俺はそう言ったが少女は

『いえ、本当に大丈夫・・・』

と言いかけて少女は倒れた。

『！？』

俺は少女に駆け寄り声を掛けた。

『おい！！ 君！！大丈夫か！？』

なんて呼びかけても少女は起きなかった。

もしかしたらぶつかって転んだ拍子に頭でも打ったのかもしれない！！

このままではいけないと思った俺は少女を負ぶって家まで全力ダッシュして帰った。

雨が降った中俺は少女を負ぶって帰ったのでびしょ濡れになって帰った。

俺は少女を畳の上に寝かせてびしょ濡れになった服を脱がせる。

ああ、どうしたものかと思いつつ仕方なく俺は自分の服をタンスか

ら出して幼女の着替えに移った俺も男だからやはり少し恥ずかしく思う。

幼女の着替えを終えて、自分は幼女に怪我をさしてしまった事を思い出して、幼女に絆創膏を貼った。

それでも幼女はまだ目を覚まさないので、俺はそつと幼女を布団に寝かせる。

さっきまで雨で濡れていたから、風邪を引いていないか心配だが、今のところは熱は無さそうだ。

と、幼女の額に手を当てたところで気が付いた。この幼女……美幼女だ！

どこが美幼女かと言うと白い肌、髪はサラサラで天然色のこげ茶色、顔は今までに見たことが無い程の可愛さ……

果たして一人にさしては大丈夫かと心配しながら俺は晩御飯の材料を買いに、買出しに出た。

それから数時間後……

買い出しから帰って来た俺は取り合えず買った材料を冷蔵庫に納めていく。

そうしていたら丁度幼女が寝ている部屋から物音がした。

俺は幼女が起きたのだらうと部屋を覗いて見た。

するとそこに見えたのは

な、なんとも可愛らしいリボンが付いたパンツだった……

幼女はしばらくその姿勢で固まったまま次第に頬が赤くなっていき

叫んだ!!

『キヤア~~~~~!!!!!!』

まだ幼くもキンツと響く高音が俺の鼓膜を揺らす

顔が赤くなった俺は咄嗟に『ごっ! ごめん!!』と言って扉を閉めた。

しばらくして扉をノックしてみた。

『どつどつぞ・・・』

と言う声が聞こえて俺は部屋に入った。

・・・空気が重い、何か話題を切り出さなければならないと俺の脳が警報を鳴り響かせている。

やばい!! これはやばい!! そうは思っているものの物話題が見つからないどうする!? 俺!!

一つの言葉を吐き出すように口から漏らす

『ちょ、調子はどう?』

と俺が言葉を言い終わるか終わらないかの時に

『別に特に変わったところはありません』

と言う言葉が返って来た。

『そ、そうですか・・・』

またもやズンと空気が重い・・・すると今度は幼女の方から質問が飛んでくる。

『ここは何処ですか？ 貴方は誰ですか？』

そう言いながら多分俺への恐怖心のせいかな幼女の声は震えている。

『俺は柳田将^{やなぎだ しやう}つて言うんだそれでここは俺の寮^{しやう}って訳、君名前は？』

『村方^{むらかた}・・・望^{のぞみ}です』

どうやらこの子は望ちゃんと言うらしい。うむ、名前の同様にやはり可愛い

『そっか望ちゃんって言うのが宜しく！！』

『よ・・・宜しく願いします柳田さん・・・』

うむ、戸惑う姿もやはり可愛いな望ちゃん。

『まあ、自己紹介もこのぐらいいにして俺は飯を作ることにするよ、望ちゃんお腹空いているでしょ？ 何が良い？』

『じゃあオムライスで・・・』

『ん、わかったんじゃない？少し待ってて』

俺が料理に取り掛かろうとした瞬間

『いや、そうじゃなくて！！』

といきなり望ちゃんが言った。

『なんで私が柳田さんの家に居るんですか！？ あの時私は大丈夫って言ったじゃないですか！！』

『その後倒れたくせに、どう考えても大丈夫じゃないよ！』

『だからと言って家に連れてくるなんておかしいじゃないですか！！』

『いや、全然おかしくないから！！ 気絶している女の子を放って置く方がおかしいよ！！』

『あのまま放って置いてくれれば死ねたのかも知れないのに・・・』

『！？』

今なんて言っただんだ？

聞き間違いじゃないと良いが・・・

こんな小さい幼女が死にたいって・・・いったい何がこんな幼女を死にたいと言うまで駆り立てたのだろう？

『お前馬鹿か？ 自分の命を軽々しく見てんじゃないやねえ！！』

自分の命を大切しない少女に

俺は荒々しく声を上げたこの子がどんな気持ちで「死にたい」と口にしたのか分からないが俺はこの怒りを抑える事が出来なかった。

『柳田さんは、何も知らないからそんな事が・・・』

『ああ、知らないね！！ 望ちゃんが今何を思っているか、何を考えているかなんか全然わからねえ！！』

そうだ望ちゃんが何を考えているか全然わからない。

でもこの少女本当はわかってるはずなんだ！！ 自分の命を捨てるのがどれ程辛いことか・・・

すると望ちゃんは声を震わして言った

『私に帰る所なんか・・・』

それはとても弱々しくて、触れてしまえば消えてしまいそうな声だった。

小さな瞳から大きな雫が落ちた

そこで俺は感情が高ぶったのか知らないが言ってしまった・・・

『行くところがなら、俺の家に住めばいい！！ 帰る家が無かったら、

この家に住めば良いじゃないか！！ ここには君の居場所もある！
！ 帰る家もある！！ そういう解釈は無かったのか！？』

『それって迷惑じゃ・・・』

『迷惑なもんか!! そんなの死なれる方が迷惑だ!!』

それ以上望ちゃんは何も言わなくなった・・・いやでも俺には最後、小さくこう聞こえた・・・

『ありがとう・・・』と

その声はとても小さかったけれど、でも確かにその言葉にはとても暖かい偽りじゃない何かが詰まっていた気がした。

『よし、それじゃ 飯にするか!少し待っててくれなオムライスだっけ? すぐ作るからさ』

俺は笑顔でそう言った、そしたら望ちゃんは

『私も手伝います!!』

と笑顔で言ってくれた。

その笑顔は本当に飛び切り可愛い笑顔だった。
そして俺は心に決めたこの幼女は俺が守ると・・・

ここから俺と望ちゃんの物語は始まった。

第一章出会い・・・（後書き）

Q 日本語おかしいんじゃないの？

A 処女作で語彙力が無いのでお許しください

Q 句読点おかしくない？

A 処女作で語彙力が（ry

Q 変態

A 変態ですよ？

Q ロリコン

A ロリコンで良いむしろロリコンで良い^q^

第二章同居人前半…（前書き）

前回はどうだったでしょうか？

語彙力が全然無い俺にとっては小説を書く事は無理だと思ってましたけど

結構楽しいので続けてみる事にしました。

それでは第二章前半を見て楽しんで頂けたら俺はそれで満足です。

第二章同居人前半…

次の日の朝、まだまだ降り続ける小雨が、部屋におぼろげながら響き渡る。

『もう朝か…』

俺はまだ、重たい瞼^{まぶた}を無理矢理抉じ開けてそう言った。時刻を見てみると午前6時30分・・・俺はもう一度寝ようとする

『あ、おはようございます柳田さん』

と言う声が聞こえてくる。

俺の隣には起きたばかりの望ちゃんが居た。望みちゃんが、眠そうにしながらそう言った。

その姿は滅茶苦茶可愛かった。

俺が生きていた中で一番可愛いものかもしれない。

そんな邪念を振り払いつつ俺は望ちゃんに言った。

『ああ、おはよう望ちゃん』

すると望ちゃんはもう一度眠そうな声で

『おはようございます』

と言った。

その顔を見たら、自分の顔が少し赤くなったので、それを誤魔化すように

『よーし！！ 飯でも作るか！！』

と勢いよく立ち上がった。

すると望ちゃんは少し慌てたように

『あ、私も手伝います！！』

と言ったが俺は

『いや、いいやすぐ出来るから少し待っててね。それまでそのちやぶ台までにも座ってて』

と言って、朝飯を作り在台所まで歩いて行く。

台所に立ち、何を作ろうと考えながら冷蔵庫の中を見たら、卵、ウインナー、ほうれん草があるから

今日の朝ごはんは、ほうれん草の玉子とじウインナー入りを作ることにした。

俺の家族は、母親が料理が苦手であり、父親は単身赴任、姉は料理はおろか家事だって出来ない人だ。

だから俺は家族の中で一番料理が出来ると確信している。

そんな事を思っているうちに料理が完成する。

俺は望ちゃんの座っている所まで、料理を運んで行く。

『はい、お待たせ、出来たよ』

『あ、ありがとうございます』

望ちゃんがモジモジしながらそう言った。

まだ緊張しているのかわからないが、望ちゃんは未だ少し落ち着かない様子だ。

そりゃ俺だって、未だに幼女が自分の家に居るなんて、信じられない…

その後、俺達はちゃぶ台に箸やら茶碗やらを並べてようやく食事が出来る形になった。

そして、二人で合掌して

『頂きます!!』

と声を合わせて食事に取り掛かった。

『あ、このほうれん草の玉子とじとても美味しいです!!』

そう言って望ちゃんはモグモグと食べ進んでいく。

『そうか、それはお気に召して何より』

俺はそう答えた。

そんな姿を可愛いらしいと思うと、昨日の言葉が忘れられなかった。

『あのまま放って置いてくれれば、死ねたのかも知れないのに…』
未だになんで望ちゃんがあんな言葉を言ったのだろつかと、疑問が膨らんでつい聞いてみたくなる。

が、俺はそんな疑問をふりはらって思った。

うむ、やはり今日も良い出来だ、俺実は料理人になれるんじゃないか！？

と阿呆な事を思いながら自分の料理に手をつけていく。

ようやく食事が終わり、二人で合掌して食器をおぼんの上に乗せて流し台に流した。

俺は食器を洗いつつ、望ちゃんと他愛も無い話をしていた。

『そついや望ちゃん。俺には姉貴が居るんだけど、その姉貴がダメダメでさー…』

俺がそういうと

『へえ、どんな風にダメなんですか？』

と望ちゃんが頭にはてなマークを浮かばせて可愛い顔でそう言った。

『そりやもう、家事は出来ないし、性格は乱暴だし、だらしないし、困ったもんでさあ…』

俺は呆れながらそう言つと、望ちゃんも少し困った反応を示していた。

そのとき ！！

ドンドンドン！！

と大きな音が部屋中を満たした。

なんだろうと思うと、誰かがドアをノックしたみたいだった。

『はい、今開けますー』

と言ってドアの覗き穴を見てみると…

っ！？

そこには、なんと母親と暮らしていたと思われた姉の姿があった！！！！！！

『将ー開けてよーお腹空いたよー』

そんな事を言いながら姉は必死にドアを叩いていた。

『ばっ、馬鹿！！　なんで居るんだよ姉貴！！！！！！』

俺は慌ててそう言った。

『お姉ちゃんに向かって馬鹿とは何よー早く開けないとこのドア壊しちゃうよー』

言い忘れていたが姉貴は空手、合気道とあらゆる格闘技を完璧に取得していた。

それでも俺は、たまに姉貴に切れて喧嘩を売るのだが、その結果は物凄く悲惨な結果に終わっている。

まあ語ると物凄く恥ずかしいのだが…

そんな事を思っていると、とうとう俺の帰りが遅かったせいかな望ちやんが痺れを切らして出てきた!!

『柳田さん誰なんですかー?』

なんというタイミング!!

俺は何とかしてこの状況を説明したいのだが、いかんせん姉貴が近くに居るから極小声で言った。

『(ちよつと今姉貴が来たから少し待っててくれ!!!!)』

だがそんな思いも虚しく望ちゃんには聞こえなかった様だ。

『え? なんて言ったんですか? もう一度言ってくれると助かるのですが…』

そんな事をもう一度言うチャンスなんてもう…無い!!

だから俺はもうこの手段しか無いと思った!!

『あ、あのー姉貴ー。ちよつと部屋散らかってるから少し待っててくれるかな?』

『何よー、前は少し散らかってても全然平気だったくせに!!? …あんた今何か隠してるでしょ!?!』

『か、隠してねーよ!!!』

『いゝや、絶対なんか隠してる！！と言つかさつさとドアを開けなさい！！さゝもゝなゝいと……』

やばいこれは姉貴が切れる5秒前！！俺は咄嗟にドアから離れて望ちゃんの手を掴んで奥の部屋に行こうとした！！

それを望ちゃんはびっくりしたかのように

『ちよ、ちよ何をするんですか！？ いきなり！！』

まあ男にいきなり手を掴まれて、びっくりしない女の子は居ないだろう。

だが俺には、それすらも考える余地は無かった…

『悪い。今姉貴が来ていて、流石に望ちゃんが居るとマズイと思うんだ。だから少しの間隠れてくれるかな？』

俺は足早にそう言つと望ちゃんは

『それはわかりましたから、早くその手を離して下さい！！』

『いや、良い隠れ場所があるんだ。案内しないと！！』

俺はそう言つたが望ちゃんは

『だから！！ 手を離して下さい！！』

流石にそこまで言われると、心にグサツと来るものがあるのだが今はそんな事を思っている暇は無い！！

『悪い。じゃあこの押入れに隠れてくれないかな？』

『えっと、ここに入れば良いんですね？』

俺たちがそんなやり取りをしている時に

ドゴン！！！！

という爆音が、埃が舞うと同時に、部屋中に響き渡った。

姉貴がとうとう痺れを切らしたらしい…

望ちゃんが押入れに入ろうとしていた時姉貴は…

すでに、俺の隣に立っていた！！

姉貴が何か構えている！？

その構えは敵を一瞬で片付けてしまいそうな、とても神々しい姿だった。

やばい…やられる！！俺はそう思って目を思いつきり閉じた。

………けどいつまで経っても、やられると思っていた気配は無い。

それどころかさっきまで感じていた夥しい（おびただしい）程の殺気が消えている…

俺は恐る恐る目を開けてみると、姉貴が倒れていた！！

俺は一瞬心配して、姉貴に近寄ったが、突然『グウー』と、言うマヌケな音が聞こえてくる。

そういえば、姉貴は腹を空かして俺の家に来たのだ。

俺は呆れ笑いをしながら姉貴の分の料理を作りに取り掛かる。

作るのは俺と望ちゃんが食べたほうれん草の卵とじウィンナー入りを作った。

俺は一息ついて時計を見てみると、8時10分であった。
俺は、ヤバイと思って急いで支度をする。

しかし、望ちゃんはとうとう……このまま置いて行っていていいものやら、しかも姉貴が居るし、最悪の状況だった。
しかしここはほんの少しでも心優しい姉に期待をしつつ、俺は学校に行く支度を終わらせて

望ちゃんに

『行ってきます』

と伝えた。

すると望ちゃんは焦った様子で

『あ、行つてらっしゃいませ。あ、あの、柳田さんのお姉さんをどうしましようか？』

『適当に起きたら飯食わしといてくれれば助かる、後昼ごはんは冷蔵庫に入れて置いたからお腹が空いたら食べると良いよ』

そう言つて俺は学校に出かけた。

第二章同居人前半…（後書き）

どうだったでしょうか？

楽しんで頂けたでしょうか？

前よりかは描写を細かく入れたつもりですけど多くなったのかな？
よかったらまたアドバイス下さい！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2843m/>

ロリコンで何が悪い!!

2010年10月14日20時28分発行